

星槎大学機関リポジトリ

論文種別	追悼特集
タイトル	学校心理士として大野先生から伝えられたこと そして私が伝えていくべきこと
Title	
著者	岩澤 一美
Author(s)	
誌名	星槎大学大学院紀要
Citation	<i>Seisa University Research Studies in Education</i>
巻	Vol.4
号	No.1
ページ	pp. 43-45
発行日	September 29, 2022
URL	http://id.nii.ac.jp/1486/00000292/

追悼特集

学校心理士として大野先生から伝えられたこと そして私が伝えていくべきこと

岩澤 一美^a

(星槎大学大学院教育実践研究科)

1. 大野先生との出会い

大野先生との出会いは10年前の非常勤講師会議で、当時教務部長をしていた私が非常勤講師の先生方に教務的な説明をしていたときだったらしい。「らしい」というのは、大野先生は私のことを認識していただいていたようなのだが、私の方ほどの方が大野先生なのかまったく認識していなかった。初めて大野先生を認識したのは、教育実践研究科の前身である日本教育大学院大学が実施した教員免許更新講習で必修科目を2人で担当したときのことであった。実は更新講習を行うにあたり、私は少し勘違いをしていて1人で担当するものと思い込んでいて、すべての内容を網羅する資料を作成していた。当日の朝、会場に到着すると大野先生からご挨拶をいただき、「先生のご専門と私が話をする内容が必修科目の内容にピタッと一致するんですよ。」と言われ、勘違いしていることに気づき冷や汗をかいたのを覚えている。教育相談のカリスマのような先生を目の前にして危うく「教育相談論」をぶちまけてしまうところであった。資料は半分を残して講義は終了し、受講者の方には「ここから先は大野先生の資料の方を参考にしてください。」などと苦しい言い訳をして何とかその場をしのいだ。

それから2年後、日本教育大学院大学は星槎大学大学院教育実践研究科へと形を変え、そこから一緒に仕事をするようになった。

2. 准学校心理士認定委員会

教育実践研究科がスタートして間もない頃、大野先生の研究室に学校心理士の受験案内の大きなポスターが貼られた。ポスターに見入っていると私の後ろにニコニコした大野先生が立っておられて、「岩澤さん、興味があるの？」と聞いてきた。そこで私は「はい、興味があります。私でも受験できますでしょうか？」と聞いたところ、大野先生は満面の笑みを浮かべて「もちろんです！」と答えた。そこから私は受験の準備を始め、何とか夏の最終面接にこぎつけた。大野先生には「何の心配もいらないから、安心して面接してきて

^a 星槎大学大学院教育実践研究科教授

ください。それと会場になっている学校心理士運営機構の事務所に9月になったら僕と一緒に行ってもらえますか？」と言われ、なぜそこにご一緒するのかわからなかったものの、ひとまず「わかりました。」と答えた。

そして確か9月だったと思うのだが、大野先生に指定された日に学校心理士運営機構の事務所に向かうと、そこには他大学の先生方もお見えで、大野先生からは何の説明もなしに「これ今日の議題だから。」と渡されたものに目を通すと、「准学校心理士認定委員会準備委員会」とあり、委員のところに私の名前があり「岩澤 一美 星槎大学大学院 学校心理士予定」となっていた。後から大野先生に聞いた話では、私を他大学の先生に知ってもらうことと外部機関で社会貢献をさせたかったとのことであった。随分無茶をするものだなど当時思ったが、話はこれだけでは終わらず、翌年の学校心理士の研究大会では学校心理士なりたての私に講座を1つ担当させた。しかしそのおかげで、翌年、千葉県教育委員会から研修会の講師の依頼を受けることになった。その報告を大野先生にしたところ、「僕の計画は着々と進行していますね。」とまた満面の笑みで返してきました。

3. 大野先生から伝えられたこと、私が伝えていくべきこと

大野先生は生前に「学校にこれから必要なのは心理に強い教師だ。」とよく言われていた。

また、学校の教師は日常の教育実践があって、問題点を発見し解決のために研究しさらにそれを実践に活かすことを繰り返す姿勢が必要だとも言われていた。

この点について、大野(2000, p.41)は「学校心理学は『講壇』心理学であってはならず、日々行われている学校教育の各領域における多様な教育実践を支え、基礎づける体系的かつ具体約な心理学なのである。」と述べるとともに「学校心理学は実践(家)と研究(家)とを循環的に媒介する固有の研究方法を持たなければならない。」としている。

近年の学校における課題は、一昔前の課題が非行や校内暴力のように外在的なものであったのに対し、不登校やいじめ、特別の支援を必要とする児童生徒への指導のように内在化したものが主流になっている。こうした課題に対して必要となってくるのはカウンセリングマインドを持った教師の養成であろう。この点について大野(2020a, p.102)は「用語そのものは曖昧であっても、カウンセリングという言葉を使っても、その意味するところは学校という教育現場では欠けがちな教師の姿勢や態度を示唆するものであったからである。」と述べている。さらに「教育に強い心理職と心理に強い教育職との連携で複雑化する『不登校・いじめ』の防止対応が緊急の課題である。」と述べている(大野, 2020b, p.158)。

また、学校の教育現場で教育相談が重視されながら、個々の教員の力量にまかされている現状についても大野先生は危機感を募らせていて、国家資格の創設も強く望まれていた。

この点について大野(2020)は次のように述べている。「現時点で教師が学校教育相談を担当しても教育上の免許(国家資格)が用意されていない。心理教育系の学会が長年要望

してきた「相談指導教諭」(名称は様々提案されている)が「栄養教諭」などと同じく制度化されることが望ましいように思われる。」

これらの考えや思いを受けて、今後私自身が学校現場の教師や自身の課題に向き合い研究を進める院生やこれから教師になろうとしている学部の学生に対し伝えていくべきことは何であろうか。これからの教師は授業や部活動の指導だけではなく、子どもたちの心に寄り添った指導ができなければならない。心に寄り添った指導を行うためには、教育だけではなく、心理についてもしっかりと学び専門性を高めるように呼びかけ、教育にも心理にも強い教員の育成を目指していきたい。

最後になりましたが、大野先生のご冥福をお祈りします。

引用文献

- 大野 精一(2000). 学校心理学の方向性について：学校教育相談の立場から（学校心理士資格認定委員会企画シンポジウム「学校心理士と教育現場」についての考察）. 教育心理学年報, 39, 37-41.
- 大野 精一（2020a）カウンセリング・マインドの必要性 星槎大学教員免許状更新講習センター編著 教育の最新事情／現代教育の動向と課題―「共生の教育」を実現するために―（pp.102-107）教育出版
- 大野 精一（2020b）教育相談（いじめ及び不登校への対応を含む） 星槎大学教員免許状更新講習センター編著 教育の最新事情／現代教育の動向と課題―「共生の教育」を実現するために―（pp.151-159）教育出版